

令和 7 年度 大学活性化経費 事業成果報告書

事業区分 (1) (2) (3) (5)

申請組織 生活科学部

申請組織長 役職名 学部長 氏名 藏澄 美仁

統括責任者 役職名 教授 氏名 村上 心

課題名 地域と大学による建築デザインワークショップを用いた実践教育
-秋田県男鹿市における日本・タイ・ベトナムの国際交流と地域再生-

	役割	氏名	所属・役職名	役割分担
事業組織	統括責任	村上 心	生活科学部・教授	統括、全体企画、他大学への提携依頼
		竹田 和行	生活科学部・助教	ワークショップ実行委員長、企画運営準備、地元企業との調整

1. 事業開始の背景・経緯や目的等 (200字～300字程度で記述)

本事業は人口減少が進む秋田県男鹿市をフィールドとし、国内外の大学が「空き家の利活用」をテーマに、「地域一体で人が育つまち」を目指した持続可能な地域のための建築デザインワークショップを実施することを目的とする。空き家の活用方法を検討し、地域住民や企業、行政に対して設計提案を行う。

本大学を中心に、秋田県立大学（秋田県）、秋田工業高等専門学校（秋田県）、国士舘大学（東京都）、琉球大学（沖縄県）、スィーパトゥム大学（タイ）、キングモンクット工科大学ラカバン校（タイ）、ホーチミン建築大学（ベトナム）が参加する。様々な地域や国の大学が連携した実践教育により、本大学の学生に多様な視点を与えるとともに、グローバル化に対応した人材を育成する。

2. 事業方法（特色・独創性）等 (300字程度で記述)

大学による地域再生事業では、研究室単位や、特定の地域の大学が協力する事例が多くみられるが、資金不足等から数年で活動が終わることも多い。それに対して本事業は、国内外の大学と地域の企業がチームをつくり連携することで、大学側の教育的観点だけでなく、地域の住民、企業、行政の利益も考慮し、「地域一体で人が育つまち」を目指すことに特色がある。地域内外の人や資金、情報が循環する持続可能な地域再生である。

また、空き家活用をテーマに、海外の学生と合同ワークショップを行い、人口減少が進む現代日本の課題に対して、海外からの視点を取り入れることに独創的な点があると考えられる。

3. 事業の成果 (600字～800字程度で記述)

■事前調査・準備 (2025年4月～8月)

男鹿市の現状を調査し、地域住民、企業、行政へヒアリングした。本企画に参画する地元の設計事務所を仲介役として、各関係者に協力を依頼した。

秋田建築ワークショップに参画する南泰裕先生(国士舘大学)、入江徹先生(琉球大学)、工藤浩平氏(工藤浩平建築設計事務所代表)、長嶋哲夫氏、竹村智也氏(キャリアナビゲーション)と現地調査を実施した。

秋田を拠点に活動する工藤浩平氏のこれまでの活動内容について説明を受けた。秋田のまちの特色を理解し、ワークショップの内容や進め方について打ち合わせした。

その後、男鹿市役所にて男鹿市長に挨拶し、秋田建築ワークショップの趣旨を説明した。市の担当職員と日程やワークショップの内容等について打ち合わせした。担当職員の案内のもと、空き家とプレゼン会場の視察を行った。

宿泊場所やワークショップ会場等、地域の関係者とともワークショップの準備を進めた。

■ワークショップ開催 (2025年9月2日～6日)

4泊5日でリサーチ、設計、プレゼンを行った。空き家の活用方法を検討し、地域住民や企業、行政に対して、公開プレゼンにより設計提案を行った。男鹿市長、男鹿市職員、地域住民から講評を受け、秋田魁新報(秋田県の新聞社)にワークショップの活動が掲載された。ワークショップ実施後、男鹿市から一部の提案内容を市の今後の活動に取り入れたいと申し入れがあった。

ワークショップの課題は、移住者体験住宅(改修設計)と空き店舗の利活用(活用方法の提案)とし、8グループに分かれて提案した。

9/2: ワorkshop会場であるホテルパークテラス OGA で教員・学生と合流。懇親会を実施。

9/3: ガイダンスを実施後、男鹿市の空き家を見学、グループ毎に男鹿市をリサーチ、TENOKA 男鹿で設計作業、エスキス。

9/4: グループ毎に設計作業、エスキス、中間発表。

9/5: グループ毎にプレゼン作業、エスキス。

9/6: 男鹿市のハートピアで公開プレゼンを実施。8グループが男鹿市の空き家の課題に対して設計提案を行った。

4. キーワード (本事業のキーワードを1つ以上8つ以内で記載)

①空き家	②地域再生	③リノベーション	④まちづくり
⑤ワークショップ	⑥国際交流	⑦産学官連携	⑧実践教育

5. 事業の達成状況及び今後の課題 (事業の達成状況を踏まえて、課題、反省点、及び今後の取組みを具体的に記載すること。また、イベント等実施の場合はその参加人数(外部・内部)についても明記すること。)

参加人数は計73名(学生55名、教員18名)、本大学からの参加人数は10名(学生7名、教員3名)であり、国内外からの多くの参加者と国際ワークショップを実施した。

ワークショップ実施後、男鹿市から一部の提案内容を市の今後の活動に取り入れたいと申し入れがあり、ワークショップ開催の効果を確認した。

今後の課題は、単発の開催に留まらず、継続的な地域再生に寄与していくことである。